中村小学校　研究通信

チーム中小

令和６年２月１６日（金）

No.１４　　文責　伊与田

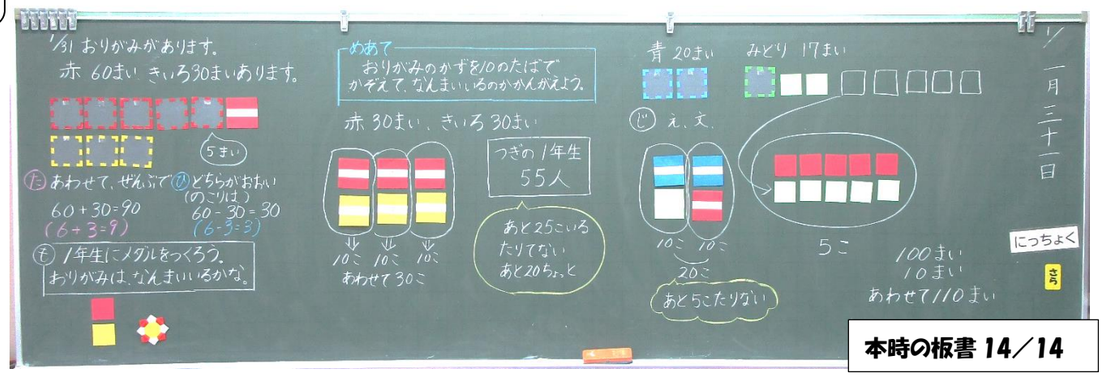
１月３１日（水）は、平野先生による算数科の研究授業でした。本単元は、１０のまとまりや数量の関係に着目して、具体物や図などを使って、数の数え方や計算の仕方を考えたりする学習を行いました。本時は、１０のまとまりに着目して考えてきたこれまでの学習をもとに、日常生活へ生かすことを重視した学習でした。本時の授業と事後研究の様子をお知らせします。

単元名　「おおきいかず」（東京書籍）　　全１４時間

１年１組　平野　幸　先生

本時の目標：大きい数の学習を使って、生活の中の問題を解くことができる。

本時における見方・考え方：数のまとまりに着目し、数の大きさの比べ方や数え方を考える。



本時の板書 14／14

折り紙２枚でつくるメダルが何個できるか、グループで考えています。

グループで考えたことを発表しています。

平野先生による授業のリフレクション

活用力について、授業ではどのような形になるのかを考えて授業を創ってみたが、初めに抑えていた①誰が②どんな場面で③何を活用するのか、という ３ つの点が授業を創っていく上でだんだんとずれてきたように思われる。何を身に付けるのかと何を活用するのかが一致できていなかったので、次はいろいろなことがしっかりとはまっていくように授業を組み立て、実際の授業では児童の意見で柔軟に対応できるような授業を創っていきたい。ICT の効果的な活用についても、もっと視覚的に分かりやすく提示できたらと思った。しかし、低学年では思考の過程では実際に操作をする方が良かったかと今回の授業で思った。

授業参観の視点（３点）に沿ってグループで協議を行い、全体共有しました。（抜粋）

１　本単元で身に付けさせたい資質・能力を育成するための主体的・対話的な学習活動の設定

〇丁寧に授業をされ、めあてを子どもとつくったり、グループ活動を取り入れたりするなど上学年へつながる学習活動が設定されていた。

▼個人思考の際に、何を書くとよいのか子ども達にとって難しく、式、図、具体物などを使ってどう表現させるのか明確にしておくとよかった。また、個人思考する時間が少なかったのではないか。

▼子どもが、何ができるようになればよかったのか、教師の説明による子ども達との確認になってしまったのではないか。

⇒資質・能力の育成に向けて、必要な色紙の枚数を求めていくのではなく、110 枚必要であることを先に提示しておき、子どもに思考させていく授業展開を仕組んでもよかったのではないか。

２　児童が本気になる問題や課題の工夫

〇生活場面で使える問題づくりにチャレンジしているところが良かった。

〇新年度入学してくる１ 年生の一日体験入学でプレゼントするメダルづくりと関連させた問題にすることで児童の意欲の高まりが見られた。

〇必要感のある問題設定となっていた。

３　「数学的な見方・考え方」を働かせるための手立てや働きかけ

〇導入場面において、既習を生かし色紙の枚数のお話からどんな問題がつくれそうか考えさせていたことがよかった。（既習が定着している）

〇教具の工夫により、１０のまとまりに着目しやすかった。

〇１と１、１０と１０の対応が縦に整理された板書の工夫がみられた。

〇１０のまとまりだけでなく、ばらの数にも着目させたことが単元末の学習場面として良かった。

▼赤と黄の２ 色でメダルをつくり、枚数の不足から、青や緑の色紙も追加した場面で子ども達が難しさを感じていた。様々な条件があったので、条件を整理する、色を変える必然性を明確にする必要があったのではないか。

▼式で表すことの難しさがあった。前半の赤と黄の２ 色でつくる色紙の必要な枚数を式に表すとよかった。

▼２ 色で１つのメダルをつくることの意味、色紙の枚数（枚）とメダルの数（個）の区別が難しかった。

▼色紙がなくなった枚数を数えるより、使った枚数を数えるとよかった。

▼自分の考えをノートに書くのは難しく、考えが残らなかったので ICT を活用してもよかった。
　→ジャムボードに付箋を貼って囲んだりしてもよかった。

平野先生の研究授業では、生活場面と関連させ、子どもに思考させる課題設定となっており、日常生活に生かすことできる力（活用する力）を育成するための授業展開が考えられていました。身に付けた力を生かし、どうやったら問題解決ができるのか、子どもが主体的に、友達と試行錯誤しながら協働的に学んでいく授業づくりが大切であると改めて思いました。

今年度、国語・算数の研究授業を通してみえた成果や課題を協議しながら研究を進めてきました。校内研修の中で再度、資質能力ベイスの授業づくりを全体で共有し、来年度につなげていきましょう！